

「ゆかは、彼氏とかいるの？」

「え……いや……いないけど？」

いつもの三人組で下校中、突然はなちゃんにそんなことを言われたので、私はしばらくもどろろになってしまった。

「えーウソオ？ ゆか、かわいいし、性格もいいし、男の子がほっとくわけ無いじゃん？」

「私……あんまり興味ないから……」

「ゆかはねえ、『お兄ちゃん』がいるからいいんだよね？」

「な、何言ってるのよ……！？」

「はなちゃん知ってる？ ゆかがちっちゃいころ『私は絶対お兄ちゃんのおよめさんになるんだ！』って言ってたこと」

「えー！ マジで……！？」

「そ、そんなこと言っていないって！ 私を顔を見つ赤にして応えた」

「そりゃー無理だわ。他の男は入る余地なし、って感じ？」

「照れちゃって、かわいいのに、もったいないねえ」

「もう二人とも！ 恥ずかしいじゃない！」

「あはは」

◆ 「すっかり遅くなっちゃった」

別れて家に着いたころには、辺りは暗くなり始めていた。

私はせっせと私服に着替えたあと、急いで、秘密の部屋の鍵を開ける。

「ただいま、お兄ちゃん」

私の視線の先には、ベッドで横になっている、『両腕が無い』兄

の姿。

私はやさしく声をかける。

「心配した？」

兄は私の方を向くと、言葉にならない声でうめいた。

「う……うあ……」

兄は両腕を失うと共に精神を病んでしまい、ほとんど口もきかないか、きいたとしてもこうやってうめき声を出すだけになってしまった。

私は兄の頭をなでながらそっと呟いた。

「心配したでしょう……」

「う……」

私はこうして、生活能力が無くなってしまった兄の世話するのが、日課になっている。

「今、夜ごはん用意するからね」

「うあ……」

私はキッチンに急いだ。

今、作っているのは、お兄ちゃんが大好きな、カレー。

兄が昔、おいしいと褒めてくれた、私の得意料理だ。

私はこうして兄の世話をしているとき、時折、昔の、兄とのとりとめの無い会話を思い出すことがある。

でも、寂しくも、辛くもない。

こうして、一緒にいられるのが、私にとってなにより幸せなことなのだから――。

◆ 「はい、あーんして」

私はカレーをスプーンにとり、兄の口に運ぼうとする、しかし、兄は口を開かない。

「ほら、しっかり食べなきゃダメでしょ」

それでも兄は口を開かない。

――もう、しょうがないなあ。

私は持つていたスプーンを自分の口に運び、軽く咀嚼したあと、兄の口に自分の口を重ねた。

「ん……っ」

舌で兄の口を開けると、口内の食物を、唾液と一緒に流し込んだ。

「ん……んんっ……」

すべて流し込んで、口の中をきれいに嘗めとつても、私は長い間、口を離さなかった。

「……んぶっ」

ようやく口を離すと、私は兄に向かってニツコリ微笑んだ。

――お兄ちゃんったら、私がいらないとなんにも出来なくなっちゃったね。

――一人じゃトイレにもお風呂にも行けなくなっちゃったね。

――でも……

「私がずつとそばにいてあげるからね、お兄ちゃん」

「う……うあつ……うあああつっ！」

私が囁いた瞬間、兄が酷く動揺し、ベッドの上で暴れ始めた。

「お兄ちゃん、じつとして」

「うああつっ！ うあつっ！ うあああつっっ！」

兄が体を振り回し、テーブルの上にあった料理をはね飛ばしている。食器がガタガタと床に落ち、中身がぶちまけられた。

「お兄ちゃん！」

私は強い口調で兄を止めようとするも、一向におさまらない。ホントにしょうがないんだから。

「お兄ちゃん、言うこと聞かないと……」

――次は両足だよ？

そう言っ、兄はびたつと静かになった。

「クスリが効かなくなってきたのかなあ？ もつと言っこと聞くやつにしないと」

もう、心配かけるんだから。

でも、安心して。

たとえお兄ちゃんが壊れちゃっても、私はこれからもずーっとずーっと、お兄ちゃんと一緒にいてあげるからね。

お兄ちゃん、大好きだよ。

インディーズ・ジョー・ンズの大冒険

「フオッフオッフオー。ようこそ勇者よ。さあ、考古学者ジョー・ンズと一緒に秘密の鍵を探し、マンデラ地方に伝わる伝説のダイヤを手に入れるのじゃー！ルールは簡単。君の選んだ選択肢にしたがって番号を探しながらその番号に一致した物語を読み進めていくだけじゃ。君の選択次第でジョー・ンズの運命が変わるので慎重に。さあ、いくのじゃー！」

st1(story)ジョー・ンズはとうとう伝説のマンデラ寺院に到着した。早速一歩中に足を踏み入れると、足元に一枚の金色の鍵が。どうする？①拾うst5へ ②無視st8へ
 st2全ての奇妙な生物を彼は倒したが、手持ちの弾がなくなってしまった……st2へ
 st3結局ジョー・ンズはこのまま、家に帰ることになった。帰ったジョー・ンズには冒険で発生した多額の費用の返済が待っていた。こうして彼は不幸な生活を送ることとなった。
 st4突進するジョー・ンズに恐れおののいて奇妙な生物たちは逃げてしまった。↓st2へ
 st5天井が落ちてきてジョー・ンズはプレスされた。ジョー・ンズの生涯はここで終わった。
 st6見事彼は橋を渡りきった。すると、前方から巨大な未確認生物の群れが迫ってきた！どうする？①手持ちの銃で撃つst2へ ②逃げるst3へ ③突進するst4へ
 st7進むと小さな部屋に入った。そこには一人の老人が座っていた。「フオッフオッフオー勇者よ。よくぞここまでたどりついた。お前の探していた『秘密の鍵』はここにある2つの鍵のうちどちらかじゃ。真に勇敢なものだけが本物を手に入れられる。さあ選んでこの扉を開くがよい」さあ、赤い鍵と青い鍵のどちらを使う？①赤st10へ ②青st11へ
 st8更にジョー・ンズが奥へと進むと、そこに大きな橋が架かっていた。横の石碑には「このはしわたるべからず」と刻まれている。さあ、どうする？①危ないので渡らないで家に帰るst3へ ②ど真ん中を渡るst6へ ③橋をかけて端を歩くst12へ
 st9ジョー・ンズはとうとう伝説の秘宝を手に入れた！すると寺院が崩れてきたst13へ
 st10扉を開くとそこにはあの「伝説のダイヤ」が！これは、まことに美しい……。だがガラスのケースに入っているから銃を使ってガラスを割らなければ手に入りそうにない。弾はある？①あるst9へ ②ない(奇妙な生物群を撃ったときに使ってしまった)st3へ
 st11歩いていくと大きな空洞が現れた。そこには、いかにも怪しそうな壺があった。高価そうだがどうする？①即、奪いに行くst5へ ②とりあえずスルー、更に奥へst7へ
 st12見事放物線を描きながらジョー・ンズは橋から転落した。なんとか一命は取り留めたが、転落場所には石碑に刻まれた二択クイズが。「切っても切っても切れないものってなあに？」さあ、どれを答える？①トランプst7へ ②親子の絆st5へ
 st13寺院脱出！崩れた寺院を背にジョー・ンズは、輝く秘宝を掲げて家路についた。のちに彼は大富豪となり、子供を持って幸せな暮らしをしたそうだ。親子の絆は大事なな……

私は今、大学1年生だ。

少し前には、成人式があった。私ももう、大人の仲間入りを果たしたわけだ。これからは、もう子供扱いではしてもらえない。親も、もう援助はしなさいと言っている。もう大人になったのだから、これからは全部自分の力で生きていけとのことだ。確かに、もうこの世に生を受けて20年になる。

しかし、私は未来に対して、漠然とした不安を持っている。一体これから自分がどうなっていくのか、想像もできない。10年後は？ 5年後は？ いや、3年後ですら、どうなっているのかわからない。

私はターニングポイントに立ったとき、いつもあることをしている。そうすると、必ず、自分がなくてはいけないことがわかる。一寸先が、闇から光に変わる。私はこれまでこの方法で、未来を切り開いてきた。

夜、布団に入ったときに、地下深くの洞窟をイメージする。そこは、真っ暗で、ひんやりとしている。壁ずたいに歩いていくと、あるところで突然、光が見える。私はその光を目指して進んでいく。しばらく歩くと、大きな広間に出る。中央にはたくさんの鍵がある。そこで、私は問いを発する。すると、問いの答えを教えてくれる鍵が光る。私は鍵を手にし、それと対応した部屋の扉を開く。

最初の問いは、「大学に残るとしたら、将来はどうなる？」だ。

扉を開いた。私は科学者になっていた。大きな研究室だ。白衣を着て、試験管を振っていた。一目で科学者だとわかった。何かの薬品を調合しているようだ。たくさんの人が一緒に働いていた。会話を聞いていたら、びっくりした。どうやら私は癌の特効薬を開発して、ノーベル賞を取ったらしい。すごい。科学者となった私は、みんなから尊敬されていた。そして、大いに社会に貢献していた。私は扉を出た。

2つ目の問いは、「起業するとしたら、どうなる？」だ。

扉を開いた。私は経営者になっていた。巨大なビルが、丸々私の会社だった。私は中国語で話していた。どうやら、中国での新しい事業の展開について議論しているらしい。同席している人たちが、私を尊敬のまなざしで見ている。壁には、世界地図が描いてあった。すごい。どうやら我が社は、世界49カ国にあるようだ。社内の人たちは、本当に楽しそうに働いていた。みんな目が輝いていた。安心した。私は扉を出た。

3つ目の問いは・・・。

もう必要ない。何も心配しなくていいんだ。わかった。私がすべきことが。何のために学ぶのか。何で社会に貢献していくのか。人は、喜ぶ事は何だろう。

自分の金のために、学ぶのか。違う。自分の幸せのために、学ぶのか。違う。自分の欲望を満たすために、学ぶのか。違う。

私は、人を喜ばせることができる人間になるために、学ぶのだ。人に喜びを与えられる人間になるのなら、社会に貢献していくという志を持ち続けるのなら、どんな職業に就くかは、小さいことだったのだ。目が覚めた。私の心にかかっていた雲が、消えていた。

グリマルデッロの物語

それは、また、街路に馬車がたくさん走っていた頃のお話

都から地方へと伸びる、長く曲がりくねった一本道の途中に、山の間を縫うようにして、一つの小さな村があった。多くの人々が旅の途中にその村に立ち寄るため、中央の街路には様々な店屋が立ち並んでおり、いつも活気に溢れていた。そんな、村のメインストリートともいえる街路の終端に、一見ただけでは民家と区別がつかないような佇まいの店があった。風雨で煤けてしまった看板には、辛うじて残る“chive”の文字。鍵屋だ。

そして、この古ぼけた鍵屋の前に、一台のタクシー馬車が停まるところから、この物語は始まる。



その日の昼下がり。玄関から聞こえるノックの音に、鍵屋の若主人・ミケールは、ペロンチーノを巻く手を止めた。はいはい、と小さく呟きながら、玄関へ向かう。ドアを開くと、眩しい陽光の中に、小さなシルエットが浮かんでいた。ミケールは、その碧眼を細める。

「はい、どちらさまですか」

「チャオ。ここが、ローマーの鍵職人のお店？」

返答は、軽やかな——まるで鈴のような声だった。

数分後、彼らの姿は鍵屋の応接室（兼リビング）にあった。先ほどのシルエット——キアラと名乗ったその少女は、応接室（玄関から一直線に通されるなり、事情の説明を始めた。なんでも、一本しかない自宅の鍵が折れてしまったので修復して欲しいらしい。

ミケールは彼女の話聞きながら、渡された鍵をさっと眺める。全体に細やかで美しい渦巻きの装飾がなされた、上物だった。痛々しくも、中央から二つに折れてしまっている。彼はついでに、彼女も眺めると、おずおずと言った。

「失礼ですが、家の方は……」

そう。今彼の前に座っているのは、どうみても十七、八ほどの少女。なぜこの年の女の子が、一人で、しかも都の自宅からわざわざここまで訪ねてきたのか。

ミケールの言葉は、抽象的なものではあったが、少女キアラは的確に意図を汲んで答えた。

「父と母は馬車の事故で三年前に」

スルリ、と出てきた言葉に、ミケールの表情が曇った。ああと声を抜き、決まり悪そうに、組んだ手をテーブルに置く。それを全く気にしない様子で、キアラは続ける。

「生前、父からこの鍵はこしらで作ってもらったと聞かされました。ですからこちらを訪ねたのですけれど」

ミケールはもう一度鍵を眺めると、ため息混じりに言った。「これは亡くなった私の父の仕事です。この鍵屋のことは

恐らく両親からお聞きになっていたのだと思いますが、私には父ほどの腕はありません——」

視線を上げる。彼女の落胆したような表情が目に入った。その瞬間、何故か彼の口は勝手に動き、切りかけた言葉を再び繋いだ。

「が、数日待っていただければ、必ず、なんとか」

この時の彼女の笑顔を、ミケールは純粋に可愛いと思った。あいにく、村の宿はいっぱいだった。仕方なく、ミケールは家の二階を貸すことにした。彼の両親が亡くなって以来、そこは空き部屋となっていたので、ちょうどよかったのだ。当然、キアラは遠慮し、最初こそ拒んだものの、ミケールの人当たりの言い笑顔と、優しい言葉に乗せられ、最後にはその提案を受け入れた。

かくして、二人は同居することになったのだ。

それから、ミケールは毎日鍵と向かい合い、キアラはせめてものお礼を、と家事を引き受けた。お互い、最初の印象が良かったのだろうか。忙しい中、共に暮らす若い二人が恋に落ちるのに、そう長い時間は掛からなかった。

ミケールは動かしていた手を止めると、小さく息をついた。早いもので、キアラが来てから五日目の昼となっていた。彼の前には、二本の鍵があった。完璧に修理された彼女の美しい鍵と、装飾の無いその合鍵だ。あとの追加依頼で、彼は合鍵も作っていた。もしまた次に折れたとき、慌てないための準備にするのだろうか。踏んで、装飾は施さなかった。彼は悩んでいた。この鍵を渡すか否かを。当然、鍵屋としてはすぐに渡すべきなのだろうが、今それをすれば彼女は帰ってしまう。それは、何よりも嫌だった。

頭を抱えていると、不意に、後ろから声が聞こえた。

「ミッキー」

振り向くと、そこには、出会った日の格好をしたキアラが立っていた。どうやら帰り支度は整っているらしい。

お見通しだな、と彼は小さく苦笑し、机の上の鍵、二本を手近な紙袋に放り込む。そうして、彼女に差し出した。

「依頼の品です、お客様」

ゆつくりと彼女に手渡す。これで、もう会うことはないのだろうか。そう思うと、胸のあたりが苦しくなった。

キアラは紙袋を受け取ると、すぐに中を覗いた。そして、その中に片手を入れると、いたずらっ子的ように微笑む。

「これは、あなたに」

そう言って、装飾の付いていない一本を取り出し——

「合鍵」を優雅に彼に手渡した。

グリマルデッロ

かき刺激

魚のイトヨのジグザグダンス

雌のお腹 ほっこりお腹が 彼のかぎ

ジグザグジグザグ ジグザグジグザグ

雌のダンス ジグザグダンスが 彼女のかぎ

雌は求愛 彼に求愛

君の鍵は 私でしょ

私が帰ると寄ってきて

おかえりなさいの そのポーズ

フサフサフサフサ フサフサフサフサ

私が元気になるかぎだ

君が私のかき刺激

たぬき

「たさいたたごたのたひたとたはたたた」

この文章、一見訳が分からないが文章中から『た』を抜けば

「さいこのひとは」

と意味の通る文章となる。このように、暗号を解くのに用いられるキーワードやメッセージを鍵という。たぬき、という単語はおそらくもともとポピュラーな鍵だろう。誰もが幼い頃に触れたことがあるのではないか。

このほか、古典的な暗号形式で代表的なものに換字式暗号がある。これは文章を暗号文化する際に各文字を別の文字や記号に置き換えるというものである。シャーロックホームズシリーズの「踊る人形」で用いられたのもこれである。この形式を用いる場合、元の文字と置換後の文字が一对一で対応していると、文字の出現頻度から元の文を解読される場合があるので注意が必要である。「踊る人形」でも『英語では』の出現頻度が大きいこと』を糸口に暗号が解読されていた。

AをBに、BをCに、という風にアルファベットを何文字かずらず、というのも有名な方法である。ずらず文字数をひとつの文章ごとに固定する方法と、途中でずらず文字数を変える方法がある。

前者はまさに元の文字と置換後の文字が一对一に対応している例である。因みに暗号ではないが、コンピューターメーカーのIBMの名前は、アーサー・C・クラークの小説、二〇〇一年宇宙の旅に登場するコンピューター「HAL9000」を『一歩進める』ことから付けられたらしい。

後者は安全だが暗号化／解読の手順が煩雑となるのが欠点である。この欠点を、機械に処理させることで解決したものがあつた。難攻不落で知られる旧ドイツ軍の暗号機『エニグマ』は一文字ごとにずらず文字数が変わるようになっていた。

現代の暗号形式として代表的なものはRSA暗号であつた。

これは公開鍵暗号と呼ばれるものの一種で、暗号化する鍵(公開鍵)と元に戻す鍵(秘密鍵)が分かれている。この利点は、機密を守る要となる解読方法を知っている人を情報の受け手だけに限定できることである。こうすることで鍵情報が漏れる可能性を抑えることが出来るのだ。

RSA暗号の場合、秘密鍵には二つの素数、公開鍵にはそれを掛け合わせたものが用いられる。当然、公開された鍵から解読用の鍵が求められるはずなのだが、実際には桁数の大きな数をコンピューターで因数分解するには莫大な時間を消費するため、それは困難なこととなっている。

このように時代の流れに沿って暗号というものは様々に変遷を遂げてきた。おそらくこれからも発展を続けるであらう。

1 砂漠のシークレットガーデン 8位 0本

秘密の花園。それだけでわくわくするところへ、砂漠&滅びようとしているという2要素が加わって、より蠱惑的なラストセッション表紙作品です。

特に消えゆくものについて「鍵がかかる」と見立てたラストが儚さを強く印象づけてくれました。

2 (無題～エリカ) 7位 1本

トトロのメイちゃんイメージで読みました。違う？

子供の不機嫌、はずみで閉じこもってしまったけれど、だんだん怖くなってきて天の岩戸を開けるのは太陽のおかあさん。

机のお化け、とか子供視線の情景描写の巧さに引き込まれます。

3 鍵を持っていた 8位 0本

人生の長い旅路のたくさんの可能性、選択肢。

それを扉という比喻で抽象的なままにつかまえようとしたところに、誠実に何かを伝えようとする姿勢が宿って共感を誘います。

4 悪夢 3位 ルパン 世

どこかで聞いた都市伝説。百話物語に絡めたところが工夫ですが、ワンフロア昇るのに1話って、いそがしすぎてちょっとリアリティが、うーん。

でも、お題がしっかりストーリーの核になっているなど構成力は、さすがです。

5 まじょのかぎ 3位 ルパン 世

初心回帰でしょうか。あらためて「ひのうえのひと」を読み直してみたり。

深い物語が背後にありつつ、展開にせわしないところがなく、「絶対にあなたを死なせたくないの」などキメのセリフもきっちり聞かせる。さすがの筆力と感嘆です。

6 見えない鍵 6位 2本

天国の鍵、魂の救済。コンパクトにキリスト教史をまとめた

ところは、ところどころの砕けた比喻のおかげでとても読みやすいです。

ただ、ラストで話題を一般化したのは良いけれど、そのぶん「鍵」の意味が薄れてしまったきらいが。

何はともあれ最後まで、もののみごとに正統派路線を貫いて、あっぱれ！

7 完璧すぎる証拠 8位 0本

2時間サスペンスの気分。話の辻褄は合っているのですが、探偵にも犯人にも感情移入できない。奥さんのナマのセリフとか、渦中の人物たちの人となりとうかがわせるものが少しはさまれていると、もうちょっと迫ってくるものがあったのでは。

8 Sweet Sweet Little Sister 2位 ルパン 世

ああなるほど！

妹に幻想を持ってはイケナイよ、とこれは前作（「お兄ちゃん、私の『はじめて』もらってくれる？」）のフォローなのですね。ご親切にどうも。

それにしても臨場感あふれるコワイほどの表現力でした。1票差で2位、と狙ったような位置取り、おめでとう！

イチオシフレーズ：「次は両足だよ」×2 「ん……んんっ……」で今週のイチオシフレーズ大賞も受賞です。

9 インディーズ・ジョー——ンズの大冒険 5位 6本

おみごと、おつかれ。とても緻密にできていて、しっかり楽しめました。なつかしいな。

イチオシフレーズ：「親子の絆は大事だな…」「ジョーダンズ」

10 私の未来 8位 0本

夢占い。ポジティブなイメージを未来に投影することで切り開いてゆく。そんなようすが少し見えてくるのですが、悩みの形が漠然としているので、何が解決したのか、もっと分かったか良かったか。

11 グリマルデッロの物語 1位 ルパン 世

グリマルデッロ、このやわらかな響きがメルヘンを盛り立てて、しあわせ色の仕上がりです。

恋に落ちる瞬間をもう1エピソード具体的に見せたいのと「ミッキー」はあんまりだなあ、と思わなくもなかったけれど、とにかくSSLSを一票差で抑えての輝かしいラスト首位で

した。おめでとう!!
イチオシフレーズ：「チャオ」

惜しい1 かぎ刺激

不可思議ポエム。魚と猫でしょうか。
お互いに鍵だ、というモチツモタレツ感が、ここちよいリズムでした。

惜しい2 たぬき

だんだん高度化複雑化する暗号について、順を追っていねいに解説したところは読みやすく好印象。ラスト2行のまとめがありきたりなので、そこを工夫するとぐっと引き立つのでは。

祝 ファイナル・セッション受賞作品

班名	賞タイトル	作品番号
q	妹の本賞 2	8
Room Key	あーこわいよ～賞	8
Sayonara チョコレート	都合のいい妄想で賞	1 0
Turning pointT	ご愁賞様です	9
U終の美	あんた考古学者で賞	9
Vista	第 6 回小学生賞	4
WILLCOM	KGB賞	1 0
X Y Z	あの時のお兄ちゃんて賞	8
keY	魔賞の女	8
orz	第10回ラストファイナル 最優秀綾田賞	5